

しく思うひとときを楽しんでいた。まもなく自分の番になる頃、司会者が来て、「ごあいさつの中で歌をご準備されていると伺っておりですが」「えっ……」突然冒頭の一言がよみがえった。ちゃめっ気たつぶりの二人にやられたなど思いながら、「わかりました」と言わざるを得なかった。引き受けたのはいいが何にしようかと困っていたとき、隣の席のY君から『乾杯』がいいんじゃないですか」と言われ、必死に一番だけを思いだし、何とか無伴奏で歌いあげることができた。

冷や汗をかいた披露宴ではあったが、この発端は十二年前の文化祭にさかのぼるのだと思う。校内合唱コンクール最優秀賞を目指して、自然と練習も熱を帯びていった。私自身も生徒の意欲に少しでも応えようと、慣れない鍵盤ハーモニカで音取りをしたり、手拍子でリズムをとったりなど生徒とともに曲づくりに懸命だった。文化祭当日、生徒たちは自信をもって堂々と歌い、満足感を味わっていた。その後、職員合唱披露、そして予定になかったアンコール。ステージに一人残された私は、「大

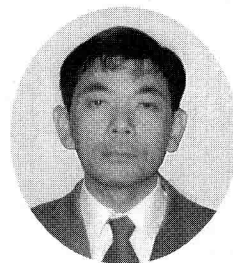
空と大地の中で」を卒業生に贈る歌として歌った。その歌を、同僚の先生の働きかけもあり、卒業前に学年全員で歌うようになり、私自身にとっても思い出深い曲となった。結婚のあいさつに来た二人は、「中学時代一番の思い出の曲です。この歌を二人で時々歌うんですよ」と話していた。自分のつたない歌が、感受性豊かな生徒たちへの温かなメッセージとして

心に刻み込まれていたのではと思うと、とてもうれしい気持ちになった。一人一人の思いを大切にしながら個性重視の教育が叫ばれる今、生徒の心に響くメッセージをいっそう大切にして毎日を送りたい。そして、そのためにも自分自身が感性豊かでありたい。そんな思いを強くした一日だった。

(郡山市立郡山第二中学校教諭)

## 「君が代」をうたう

高松 丈師



各競技の五輪予選が、日本国内や世界各地で行われている。この秋、私は家族でサッカーの最終予選の応援をしてきた。甥の全日本代表中村俊輔に思わぬ招待をうけたからである。

国立競技場は、試合開始四十分前だというのに、異様なほど盛り上がり上がっていて、まるでイタリアのセリエAの会場のようであった。

試合開始前、両国の国歌が有名歌手によって歌う場面がきた。日本の国歌斉唱は、燎原の火のようにスタンドを巻き込んだ大合唱となった。「君が代」は儀式的で厳粛な歌とばかり思っていた私は、田舎者のせいか恥ずかしさのあまり小さな声でしか歌えなかった。しばらくすると、周囲の熱き思いに圧倒されたのか、自然と大きな

声になっている自分に気がついた。そこには始めの戸惑いはなく、同じ日本を応援する日本サポーターとしての私があった。昨年、国旗・国歌法案が成立し様々な論議がかわされてきた。国家的行事や国を代表するスポーツのイベントでは、必ず国旗の掲揚や国歌の斉唱がなされるのは、世界各国の常識である。国に誇りを持ち、自国の文化を大切にしていくのがよく分かる。

これから卒業の季節になるが、子供たちは、「君が代」を例年のように歌うことになる。いつかこの子供たちも大きくなり、日本という国を支える一人一人となる。地域の仕事や海外へ出て国際的な仕事につく人も数多くでるにちがいない。インターネットなど情報網の拡大がすすむ二十一世紀は間違いなく国際化の世紀である。このような時、国歌斉唱や国旗の掲揚に出会う機会は、どんどん増えていくであろう。そこで、自国の国旗や国歌の由来や歴史など知らないでは立派な国際人を語る資格はないように思う。

新学習指導要領では、国旗・国歌についての指導を明確に位置づ